

入選 徳島県 正木 健太 様 (高校生 男性)

母は、私が中学三年の時大きな手術を受けた。脊髄の手術だった。それは非常に繊細かつ人体の重要な部分で、術後大きな後遺症を残す可能性が高いと担当の医師からは事前に説明がされていた。家族、親戚一同も十分その事を理解し、了解した上で施術を依頼した。そして母は歩行困難となってしまった。ある日突然だった。私は深く動揺した。覚悟していたとはいえ、いや覚悟出来ていなかったのかもしれない。「まさか自分の母親が。」こんな気持ちが自分のどこかに巣食っていたのだろう。これからの生活はどうなる、このままの家で暮らせるのか、望み通りの進路に向かえるのか。様々な心配が自分の中で渦巻いていた。今思うと、人生での岐路とも言える高校入試を控える自分にとって、この現実は大きな精神的負担であった。皆が入試に向かって意識を集中させている時期に自分は他の事に気を配らなければならなかったのだ。ハンディキャップを感じざるを得なかった。はたまた、動揺は自分だけのものではなかっただろう。家族、親戚も同様だ。母が日常生活を送るうえで、家族からの支え親戚からの支援というものは必要不可欠だ。実際、現在も祖父母には何かとお世話になっている。当時は到底訪れるとは思ひもしなかった運命を目の前に、多くの周りの人々が不安を感じたのだ。

しかし今、私は思い通りの進路を実現し志望した通りの高校に通えている。家族、親戚が一緒になって協力し合って母を助けている。母は、たくさんの人に支えられつつも、自らの力で出来る事は精一杯行い、少しでも自立できるようにと懸命に家事をこなしている。そう、皆が前を向き決して将来を悲観することなく明るく暮らしているのだ。あの思い悩んでいた時期には想像もしていなかったごく普通の生活、それができている。その理由が、ひとえに国の公的年金制度なのだ。決して裕福とは言えない私の家庭にとって母のパートとしての収入は大事なものだ。しかし、障害の影響で辞めざるを得ず生活だけでいっぱい。母はどんどん引きこもりがちになっていった。そんな時期に、母が身体障害者第一級に認定され障害年金を受けられるようになったのだ。いつしか、私の家には

スロープが作られた。手すりが付けられた。車いすがやってきた。家は母に優しい姿へと変わった。住人にとって住みやすいという、家が本来あるべき姿へと変わったのだ。お陰で母は外に出るときは車いす。家の中にいる時は杖をつきながらの歩行という生活に切り代えることができ、行動可能な範囲が広い車いすを利用することによって、障害年金を受ける前よりも外出することが多くなり性格が明るくなった。そうすると家庭に笑顔が増え始め、手伝いに来てくれる祖父母も楽しそうに色々としてくれる。つまり、障害年金から私の家庭の好循環が生まれたのだ。私はこの事実気付いた時、日本に生まれて良かったと心から思えた。たくさんの人の支えに感謝できた。そして、この制度は何がなんでも続けていかなければならないと思った。なぜなら、私と同じような境遇に立つ人が将来必ず出てくるからだ。人生とは人間が推し量るには難しすぎるもの。誰にどのような事が今後起こるかは、どうやっても想像がつかない。だからこそこの制度は重要なのだ。他の誰かが思いもしない不幸に遭ったとき、みんなで支え合うシステム。社会を構成する上で、助け合いとはその根本であり理想ではないか。近年少子高齢化の影響で難しい局面に立たされている公的年金制度だが、すべての国民が関心を持ち一億の英知を結集させれば必ず解決できるはずだ。まずは、自分が公的年金制度を確立させている人間なんだという自覚を持ち、深く考える必要がある。私もこれから、より一層理解や知識を深める事が出来るよう勉強をしていくつもりだ。それが私に出来る恩返しだと分かったから。